
ベン・トー"沢桔姉妹とその義弟"

織田上総介信長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ベン・トー” 沢桔姉妹とその義弟”

【Nコード】

N8888Z

【作者名】

織田上総介信長

【あらすじ】

ベン・トーの二次を思いつきでチャレンジしてみようかと思っています。

オリキャラ紹介（前書き）

一応、設定を考えてみました。

オリキャラ紹介

・名前：サウギヤスツナ沢桔泰綱

・年齢：16歳

・学校：烏田高校二年

・容姿

160半ばと周りの男子達より身長が低い事を気にするものの話題に触れなければ特に問題ないらしい。また、ボサボサな寝癖みたいな髪は義姉である鏡から毎朝、指摘されるものの直す仕草を見せながらもその髪型でよく出歩く事から本人曰く大して気にしてないらしいが、義姉の梗には元々、やる気が無さそうな垂れ目で長年弄られるものの基本的に無視しているように見せかけ若干コンプレックスを抱いている。

・二つ名：“仕置き人”又は“闇夜の狼”

・由来：基本的に弁当争奪戦では、犬かまたはたまた大猪に豚に敗北した狼から懲らしめるよう依頼される事から単独で相手を仕留めながらも相手が狙った弁当を勝ち取るという事から仕置き人又は闇夜の狼といった二つ名を貰っており

半額弁当争奪戦が始まる手前では、何処にいるか解らないくらい存在感が薄いのが特徴的らしい。

・経緯

元の名字は不明だが両親が他界した為か、身寄りの引き取り先が父親の知り合いでもある沢桔家という形で養子として育てられ

双子の義姉とは、中学まで同じだったが勉強が苦手だったせいもあり烏田高校へ入学する。

・戦闘スタイル

相手の技を受け流しながらも鳩尾や喉元など急所ポイントを割り箸又は鳩尾なら拳・喉元なら指先を使って仕留めるらしく

特に、狙い目でもない狼が襲ってきた場合は瞬時に拳一つで鳩尾に決め込むらしい。

・名前：情報屋の加次郎（泰綱が付けたあだ名らしく基本的に本名不明）

・年齢：16歳

・学校：烏田高校一年

・容姿

身長は、彼より若干高く170前半くらいはあるらしく常に狐目なところが特徴的である。

・備考

スーパードという名の戦場で半額弁当の争奪戦には参戦しないものの泰綱とは、中学時代から昔馴染みの後輩みtainな人物らしく

仕置き人サイトを開いては、掲示板での書き込みで狼達の苦情を対応しては泰綱に仕事の依頼を進めながらも情報収集を得意分野に行っており

依頼人とは、出会い先を指定して仕事に関する依頼の話から報酬に関する話題まで進めてくれる為

泰綱曰く、彼の仕事には手出ししないらしい。

プロローグ（前書き）

思い付きで作った作品ですが、よろしくお願ひします。

プロローグ

どんな形でも恨みっつていうものは御座いましょう。

特に、スーパーという戦場でお困りでしたらお貸しします。

何せ、私達は道に迷いし貴方達の御味方でありますので気概なく願います

報酬は、打ち合わせを行う次第でお話させて頂きます。

最近、このサイトであまり獲物が狩れない狼と言って良いのか怪しい連中から戦場を騒がす大猪や豚を潰すか

はたまた、犬といった群がる連中をぶっ潰すというのが主に報酬次第で依頼を請け負う者がいるらしく

意外とその依頼を果たす為に幾度か拳を交わったりもするのもある

てその男は後輩から届いた話一つで今は、ジジ様のところに現れる大猪を仕留める為に出動している。

「ちつ、はたまた面倒な”仕事”だな……………加次郎の野郎ももうちよいまともな依頼を引き受けてくれりゃ楽に小遣い稼ぎくらいは出来ると思うんだが……………」

「ブツブツ言わないでそこを退きなさい！あたしはこれでも忙しいのー！」

「黙れ豚ババア！！テメエみたいな勝手な奴がいなけりゃこんな面倒なもん引き受けなくても良いんだがな……………」

青年は、大猪と名乗る体つきが大きい主婦の買い物かごを抑えながらも猪みたいな突進力を食い止めており

化け物と化している大猪が弁当を掴む寸前に進行していくと同時に、彼女の膝を後ろから思いつき蹴りを決めておいたせいか

買い物かごから離れた化け物が仰向けに倒れていく瞬間

半額神であるジジ様が半額シールを貼り終えたのを目安に青年は、

争奪戦が始まったと同時に彼は近くに見える弁当を掴んだままその場を過ぎ去ると

外には、青年より若干身長が高い狐目をした後輩らしき男が両手を握り合わせながらもへこへこと頭を下げながら彼を外で出迎えている。

「いや〜流石、旦那っすね。相変わらず”仕事”が手慣れてあっしは感激しましたよ〜」

「ったく、あんなババアを蹴りあげなきゃならねえなんざもう懲り懲りだ。ほら、これやるから例の物はもう揃えてあんな?」

「へい!お頼み通り旦那があの子のお姉さん相手にご用意する惣菜の方と報酬の半分である1500円も渡しておきやす」

「まあ、あんな化け物相手ならそこそこな額だろうな。んじゃ、今夜はこれまでだ。下手に足つけられるんじゃねえぞ」

「わかっておりやすよ。ではでは、旦那もまたよろしく頼みますよ」

加次郎という男に見送られながら旦那と呼ばれる青年は、彼が用意

した惣菜とスーパーで勝ち取った弁当を交換しながらも報酬を受けとると

青年は、闇夜の中へと姿を消していく。

そして、周囲を見渡し誰もいないか確認すると目の前のマンションへと入り

とある一室を開ける前に用意した合鍵をこじ開けると

今日は、家主の二人が生徒会の仕事だとかで忙しいと聞き付けているせいか

冷凍庫に凍らせサランラップに包んであるご飯をレンジでチンし終えて

加次郎という”仕置き人”仲間が用意した惣菜をレンジで温めている間に何かガチャガチャと物音がしたのでテーブルの上に置いてある鍵を眺めながら飯をのんびりと味わっている。

「そついや桔梗姉が今日は鍵を持ち歩く日だったなあ……………まあ、俺もまだ飯を平らげてる訳でもねえからな。ったく、今日は証拠の

物を平らげながらもどつか逃げてみるか。にしても、何か妙に静かななあ……………」

青年が妙に静かな物音だと思い静かに玄関へと近寄るといきなり携帯の着信音が鳴り始めたので思わず電話を受けとると

先程、桔梗姉と彼が言っていた本名沢桔梗サツギキョウが彼の電話を鳴らしていたので、玄関にあるドアの穴を覗いてみれば何処と無く満面な笑みを浮かべている彼女から何か漂っているのを感じながらも知らないふりをしようとする。

因みに、青年が義姉の梗を桔梗姉と呼ぶのは二人目の双子の義姉も漢字は違えど同じ鏡キョウと読むのでそちらはかがみ姉と呼んでいるらしいがその話はさておき

青年は、この場で義姉である梗の怒りをどう抑えながらもゆっくりドアを開けながらも苦笑を浮かべ

その後、義姉でも彼が意外と頭が上がらない梗から説教を受ける。

「泰綱、血が繋がって無いにしろ姉を置き去りにしてお食事した理由が私達の方まで用意し忘れたとは何事ですか！！いいですか、こっちは生徒会のお仕事でクタクタなのです！私達が湯船に浸かってる間にでも何かお食事くらい軽く御用意なさい！！解りましたか？」

「へ、へい……………承知してますとも」

「姉さん。泰綱も悪気が無さそうなんだし今回は多目にみておきましよう。それより、泰綱の財布を覗いてみたのですけど意外と入ってますよ?」

「ん?そういや、テーブルの上に置いてた財布が……………あ、ああああ!…!かがみ姉、それだけは堪忍願いますよ!それ、俺の財産ですからそつから出すのだけは御容赦願います!」

「……………泰綱。私と約束しましたよね?あまり、姉さんを困らせたから私も許さないって……………」

「はっ……………わ、分かりやした。奢らせて頂きやす」

沢枯泰綱と名乗る青年は、義姉の鏡に睨まれたまま彼女の言いなりになる事を認め

沈みきつたせいか床に掌をくつつけたまま頭を下げ燃え尽きた泰綱の頭を優しく撫でた鏡は、仲が非常にいい姉と共に義弟の財布を片手にファミレスで食事を摂ったせいか

彼が”仕事”で稼いだ報酬はその場で消え去った。

因みに、彼の1日の大体は双子の義姉達にスケジュールまで決められるのは言つまでもない。

第1話（前書き）

最近、ベン・トーにハマってしまい思い付きでチャレンジしてみましたが

よろしく願います

第1話

S i d e 泰 綱

双子の義姉達に、折角稼いだ報酬を消されてから早数日が経った頃
だったるうか

HP同好会にて1年が二人も入ったという加次郎から情報を聞きつ
けた私は、彼からどんな奴が入ったのか聞くことにすると奴は、狐
のような目付きで若干瞼を開けてニヤリと笑みを浮かべて答える。

「……………そうですね。まだ、スーパーの半額弁当売場が戦場で
あると身体に染み付いてないのでしよう。まあ、そんな事言う私も
大してあそこが戦場だなんて肌で感じちゃいやせんがね。あゝで
すけど”氷結の魔女”がどうやってあの二人を狼として育てるかは
見物かもしれやせんぜ」

「まあ、そりゃ面白そうだろうな。ただ、俺はあいつが強いのは解
るんだが……………他人に物を教えるつつうのが未だに想像出来ねえな
あの魔女が闘う場面なんざは見たことあっても未だに、鉢合わせに
なった事がねえからよくわかんねえんだよなあ……………とはいえ、俺

はあんな目立つ奴と無闇に対立する気なんざねえけどな」

「ヒヒッ、旦那は影でコソコソする方がお似合いですからねえ。まあ、それがあつし達には生きやすいんですよ。あつしの見立てじゃウイザードみたいな強豪相手なら手を焼くかもしれやせんが氷結の魔女とはいい勝負になると思いやすぜ」

「……………闘った事がねえから本当にいい勝負になるかは解らんがな。で、今日ここに呼びつけたのも何か”仕事”か？なら、説明も頼むわ。俺もこれから義姉達が早く帰ってくるから惣菜買い出しやらご飯を炊いたりと夕飯準備からお掃除まで忙しいんだわ」

誰もいない体育準備室前で奴と話し込みながらも時計の時間を気にする俺に加次郎は、”それなら早く終えますんで”とニヤニヤ笑いながらも掌を上下に擦り合わせながら頭を低くした姿勢で何かやって貰いたい”仕事”を既に持ち込んでいる素振りを見せながらも

事の経緯を一つ一つ思い浮かべるように話し込みその内容を確認してみりや

今回は、半額弁当絡みの話といや話なんだがどうやら最近、東区から現れたとか聞く”湖の麗人”がどんな奴か偵察してこいという帝王からの指示らしいが

残念ながら何処にも属さない立場である俺等かりやみりや大して言うことも聞く義理が無いせいか

報酬次第じゃないと動かない事を伝えるように掲示板に登録してあるアドレスへとメールを送る。

「まあ、その”湖の麗人”とかいう奴も狼に成り立てなんだろう？東区の連中ならまずそんな犬に近い奴なんざ狼としても認めねえだろうよ」

「……………ですが、良いんですかい？モナークといや今じゃ東区を束ねながらもウイザードに次いで相手にならないでしょう」

「まあ、良いんじゃない？彼の狙いはこっちの力を把握する事だろう……………とはいえ、新米狼を相手に”仕事”で仕留めてもつまらねえからな。とはいえ、モナークの勢力ならここを既に嗅ぎ付けてるだろうから”ダンドーと猟犬群”が仕留めるのをネタに距離を置くって事で使えねえかなあ……………」

「ヒヒツ、あいつ等なら確か、西区のエリアでうるちよろしてるらしいでっせ。とはいえ、同じ校内にいる犬の群れを戦場で黙らせりや確かにモナークもここに構わないでしょう。ただ、報酬の額が怪しいかもしれやせんぜ」

「…………構わねえよ。それに、いくら強い奴だったにしても俺と
ちや闘う気すら起きねえ事くらい伝えときゃ良いだろう」

その後、向こうからもその話なら良いって訳で俺は、少々アブラ神
がいる戦場に待ち受ける犬共に群がらせるよう加次郎が流した挑発
を仕掛けてみりゃ

その晩にアブラ神の店に寄れば、12〜3くらい集まったダンドー
の猟犬達が牙を向いたままこっちへ目を向けてるのがよく分かる。

つたく、ウチの剣道部員達が退屈そうな連中ばかりで助かつちや
いるんだが

さて、どう料理しながら弁当を狙ってやるつか辺りを見回してみりゃ

店内のお弁当コーナー周辺では他の狼達も2〜3匹いる様子でもあ
ったが

あまり奴等もこっちには、目を向ける様子も無かったせいか

俺は、牙を立てる連中を見渡しながらも相手がどう攻め込むか確認
し終えた後に、口元を隠したままアブラ神が半額シールを貼ってい
くのを眺めている。

「……………案外多いですな。こりゃ、とある方にはいいお土産話になりそうだ」

「ふっ、東区の帝王に君が屈するとは思ってもいなかったな。全く、犬嫌いな君がこちらと同じ事を行ってるじゃないか？」

「はっ、負け犬先輩がよく吠えるじゃねえっすか。後、俺は東も西もどっち付かずなんでね……………どっかにつこうなんざ考えちゃいけませんよ」

「ちっ、相変わらず気に食わない奴だ。ここで俺が仕留めてみせる。覚悟しとけよ」

「……………んじゃ、今回は俺が一つでも弁当を取れば勝利。出来なきゃその場から去ってもらいますよ」

獵犬達の大將格が俺の近くに寄って睨み合って数十秒か過ぎていく中

俺達の戦闘が始まりました。

S i d e 鏡

今日は姉さんに無理を言っただけに帰らせて貰い最近、西区や東区と関係なくスパーに現れる”闇夜の狼”又の名を”仕置き人”という二つ名を持つ狼がどんな方か気になっていたのだ

最近、帰りが遅い義弟の携帯履歴を彼が寝込んでる間にでも覗いてみたけど”加次郎”とかいう人から一通メールが届いてたのが気になります。

「……………それにしても、謎ですね。」仕事、お疲れ様でやした”なんて部活や委員会活動などには手を出さないうちから帰れば部屋に籠って休むかこの家事しかない人が何を手伝ったか聞き出したいところですし、ここはこの手でもうってみましょう」

それにしても、普段から携帯電話を忘れるなんて珍しいもので

とはいえ、あの義弟が帰って来るのは最近になってから遅くなつてますから戻って来たとかろを見計らつて連絡をとつておきましょう。

それに、最近では東西地区どちらも関係無く騒がす”闇夜の狼”がウロウロしてるのと義弟が急に帰りが遅くなつたりするのにも気になりますね。

まあ、大抵はクラスの連中達と遊んできたとか言つてたりしてますけどどうも裏を掴めばその様な気配が見受けられません。

そもそも、あの義弟は他人とじゃれ会う趣味が無いせいか、休日も家事が室内でのんびり寛ぐか一人で出掛けるかのどれかしかないのもあつて基本的に、何を考へてるか解らなかつたりしたんですが

どうも、最近では私達と話をする気配もあまり無いのもあつて何か隠し事でもあるのではと考へても

やはり、まだはつきりとはしませんがどうしたら全て話してくれるかちよつとばかりか弄つてみた方が良いかもしれませぬね。

そんな事を考へながらも義弟の携帯をテーブルの上に置いとぎ、夕食の準備をしている時でした。

何故か、ボロボロな姿でご飯のおかずとして惣菜をいつも通り幾つか買い込んでいる泰綱が疲れきった表情で

他愛もなく”ただいま”と言ってテーブル上にある携帯を見つめながらも浴場へ向かっていく様子でしたが

あれは、間違いなく何処かで闘った後にしか見えませんし

どうもあの姿を見ると三年前に私達が”あの男”にやられた後から数日経った時から今のような姿で帰って来た日を思い出します。

まあ、あの時もあの義弟は黙ったまま私達の心配をよそに黙りを続けてましたが

今もその感じとは違いますがどうにも似た雰囲気が残ると感じてた時でした。

突然、義弟の携帯が鳴り始めたので、私はその携帯文章を見て啞然となります。

”西区の猟犬を率いてる山原先輩が帝王に氷結の魔女とぶつかる姿勢を見せたらしいっす。いや、旦那が山原先輩以外の連中を黙らせて正解でした。本当、大したものです。まあ、あの猟犬達も12人

も肋骨折らせて戦闘不能にまで陥らせるなんてなかなか出来ません
つすよ。流石は、闇夜の狼だけありますよ！”という内容でしたけど
どうやら、何日も探してた”闇夜の狼”がこんな身近にいたなんて
絶対こうというのが嫌いでもない姉さんには言えない話かもしれない
でしょう。

「はあ、”闇夜の狼”とかいうこの町じゃ東西関係無く騒がしてた
のが、私達の泰綱だったなんて姉さんに話してしまえば確実に騒ぎ
になるでしょう。となれば、どうやってあの義弟を止める手が浮か
び上がりませんか……………」

「何が止める手が浮かばないんですかね……………詳しい話でも聞かせ
て貰いましょうか？因みに、あまり事を知られちゃこっちも自由気
ままに動き回れませんからそいつは他言無用で願いたい」

「……………それは、構いません。ただ、私が姉さんに黙っておく事が
出来ると思いますか？」

泰綱が何か考え込むような素振で何か頭を悩ましていたようでしたが

彼が何を考えてるか今になって分かる事ではないので

少し返事を待つのに椅子に座ろうとした瞬間

彼の考えが纏まったのでしよう。

何か、案を浮かびながらも私の目を真剣に睨むよう見つめています。

「まあ、かがみ姉に知られて桔梗姉に黙っておかせてもあの姉が爆発しちゃかがみ姉でも止められない事がありますし、どっちにしろ桔梗姉に黙っておいて何も無いわけが無いと思いますから基本的に学校にいる時間以外なら開けられると思いますんで、いつでも微々たるお力ですが蔭ながらお貸し致しますよ？それに、貴女達には色々之恩もありますし、抵抗する気も更々無いんですけどね……………」

「え？本当にそれで良いんですか？私は兎も角、姉さんがそういう話に遠慮無い事くらい貴方でも分かると思いますけど……………」

私は、思わず拍子抜けしてしまった。何分、目の前にいるのはあのモナークですら下手に服従させない一匹狼であり

その狼は西区とも距離を置きながらも今まで単独で動いてたんです。

そんな人が自分がプライベートな時間まで私達に協力すると言っているんですからここは、こちらも何かしら頼んでみるとうましよう。

「……………確か、貴方は私達以外に東西どちらにつかずな方でしたね？」

「……………そうですね。ただ、貴女達のお頼みなら出来る限り蔭ながらご協力しますがどうしましたか？」

「でしたら、姉さんにはこっちから上手く伝えますので帝王の^{モナーケ}情報を分かる範囲で構いません。ここに帰ったら私達に語ってくれると助かります」

「まあ、それくらいなら構いませんが……………もし、面白そうな事があれば携帯で構いませんか？いや、丸富に向かうなんざめんどくさいなんて意味なんてありませんよ？そりゃ、これからは一文も無い”仕事”だから面倒だとか思ったりもしませんから誤解無きよう……………」

「……………何故でしょう？泰綱や姉さんってたまにボロが出やすいのが似てますよね……………お互いに普段からもう少し仲良くしませんか？」

「とはいえ、かがみ姉がいなきゃあの姉さんに話が通じない気ならありますがね」

とはいっても姉さんと泰綱はどつども良いような話だけで盛り上がりますけどね。

まあ、お二人の仲は見てて面白いので良しとしまじょう。

第2話（前書き）

何故だろうか、原作を読むとスーパーの弁当を買いたくなる……

第2話

S i d e 鏡

義弟である泰綱が”闇夜の狼”という二つ名を持つてゐる狼である事や、彼が昨夜から私達の頼み事なら蔭ながらサポートしてくれるとも言ってくれたので帝王^{モナーク}について調べ抜く事まで引き受けてくれた経緯まで話し込むと

何か考え込む姉さんが何か閃いたと言わんばかりにこちらを見つめていたので私は、姉さんが何を考へてるか見抜くよう溜め息を漏らしながらお答えします。

「……………まさかだと思ひますが、私達が通う校内まで呼びつけて生徒会の御仕事まで付き合わせるなんて言ひませんよね？」

「あら！？何で、わたくしの考へてる事がわかつたのです！？流石、鏡ですわ！私と泰綱の事になると何でもお分かりなのですね！」

「……………い、いえ。ただ、姉さんと泰綱の分かりやすいところが似過ぎてるだけです。ほら、欲しい食べ物を選ぶ際も迷わず同じも

のを選ぶじゃないですか……………」

「あれは、泰綱がわたくしの真似をしてるだけですわ！ー確かに、鏡と似てお互いどんな動きをするかまでは分かりますが……………」ほら、泰綱が起きてモーニングコーヒーを御用意致しますからトーストの準備を頼みますわ」

私がキッチンに立って食パンを暖める準備をする際にフライパンを用意する時に泰綱が何か姉さんに呼ばれたような気がするような事を感じたからと本当にコーヒーを用意する為

彼が気に入っているインスタントのコーヒーを淹れる為にティファールでお湯を沸かしながらも近くで彼が愛用するカセットコンロでマシユマロを幾つかの1つずつ丁寧に何十秒か炙っており

お皿に3、4個くらい置いて何か優雅に待っている姉さんの前に置くと姉さんもそのマシユマロを1つずつ摘まみながら頂いています。

全く、毎日こんな感じで私の席と姉さんの席にブラックのコーヒーまで用意すると

姉さんも慣れた雰囲気で小さなマグカップコーヒーを片手に味わっている姿を見ると何も解らない人達から見たらどう感じるのか少し気になりますけど

大方、今までの経緯を話しても仲が悪かったなんて信じてくれないでしょうね。

とはいっても、これが我が家の1日なんて誰が思い浮かべるのかちよっと気になりますよ。

「……………そういえば、向こうの学校では大丈夫ですか？一応、貴方の事は鏡からお話を聞かせて頂きましたけどたまに、寮生活とかご興味無かったりしないのですか？」

「……………まあ、一人部屋もあるから悪くないようにも感じますが、やはり朝っぱら騒がしいのは苦手ですからね。こうしてのんびりと過ごせりゃ良いですよ」

「あら？思ったよりも御意見が合いますこと……………それより、今日から早速ですけど……………」

「……………学校帰りにそちらに寄った後に、モナークの偵察つてとこですかい。まあ、俺は特に放課後は用もねえんで構いませんよ。ただ、あれの大賃は用意してくれりゃ寄る次いでがてら買っておきますよ」

「ええ。頼みますわよ。今、お金を御用意しますんで来る際におけるは差し上げますので、買ってくれれば助かりますわ」

姉さんから五百円玉を一枚渡された泰綱も受け取って理解しているところを見ると二人が似た者同士というか同じ物を選ぶとこまで見かけちゃいますけど

何を買つかさえお互いに間違えないというのも周りから見れば何が起こってるか気になる領域でしょうが

あの二人の生活では、特に不思議でもなんでもありません。

ただ、二人の気が合うだけなんです。

なんて、説明したいとこですけど二人が話し合うと何か違和感を感じてしまうのは何故でしょう。

「そういえば、”湖の麗人”なんて言う東区の狼を見かけた事はありますか？」

「そついや、まだ無いっすね……とはいえ、別に興味も無いですよ。ただ戦えるかどうか面白いじゃないですか？」

「フフ、まさかそこまで御意見が合うなんて思いませんでしたわ」

「ったく、血も繋がっちゃいねえにも関わらず何か分かつちゃうんですよね」

「お互いに、暴れる事が生き甲斐なんでしょうけど………全く、暴れるんなら別でやって下さい」

「「勿論」」でずわ

何故でしょうね。

もうこの二人は眼で語りながら何かしら今夜の御予定が経ったらしいです。

ただ、一応語らせて頂きますがこの二人は別にコンビを組んだ事はありません。

それなのに、あの二人はお互いに事を進めるとなれば手加減無用に闘うとなれば容赦無いんです。

大方、予想が当たれば二人の狙ってる狼の事すら何となく予想がついた時には、既に二人してお食事を済ませており

泰綱も既に学校へ向かっております。

そして、放課後で生徒会の仕事をしてる最中に泰綱が期間限定で売られているお菓子と飲み物を机の上へ置くと彼が座る席には、いつの間にか彼が好んでいる先程、姉さんが買っていた無糖のコーヒーが置かれております。

「あのう……………姉さんは何で彼が無糖派だって分かるのですか？」

「ああ、何となく分かってしまうのですよね……………それに、あの人の事ですからこのコーヒーに貼ってあるシールをお集めして景品でも狙ってるんでしょう」

「因みに、今年からはお勉強をみて差し上げますからいつでもここにいらっしやい」

姉さんがお菓子の入ってる箱にテープで貼られた手紙らしき物を受け取りながらも何かニヤリと怪しげに笑っているとこを見て改めて気付かされました。

本気で、何処を攻め込むか既に打ち合わせが終了したんでしよう。

全く、今まで姉さんを止めるだけでも精一杯だったというのに、次はそんな姉さんのアクセル的な存在として手を組んだ泰綱を見たところ何かしら標的まで想像は出来ます。

十中八九、朝に話していた”湖の麗人”とご挨拶がたら暴れる予定なんでしよう。

とはいえ、今まで一匹狼として暴れていた”闇夜の狼”と三年も前まで私と共に暴れていた姉さんがどうタッグを組むか見物かもしれないと考えながらも仕事を進めてる中

お互いに、さつさと終わらせんがばかりに急いでいる姿を見たところ彼が烏田高校へ通ってるのが何か勿体ない感じがしまけど

何故でしょうか？

この二人が仕事を素早く済ませてるのが新鮮に感じます。

それに、こうして来て貰うのもいつでも構いませんが出来れば、何か一つくらいは会話があっても良いような気がすると考えていた頃

二人がスーパーの半額弁当を狙うのは構わないのですけどお互いに戦闘スタイルも解らないのどう闘うのか聞いてみると二人共、考え込むような動作をしながら作業を一旦止めて何か閃くと同時にお互いに睨み合い

流石に、ここまでいくと何を考えているのか想定するのがめんどくさそうになるとお互いに私の方へ眼を向けて睨んだのには流石の私でも啞然となります。

「話し合う必要も無いでしょう」

「……………ええ、どうせお互いにどう闘うかも解らなければその方が早いかもしれませんわ」

この無計画なとこまで意見が合うとむしろ不安で仕方がないと思いつながらも生徒会の仕事を終わらせ二人の後を追って一般客としてお二人のお力がどんな物か見てみれば姉さんと泰綱が互いに眼を向けられるとはいえ左右対象的な位置で互いに余ったお弁当を睨みながらも今夜いる四人くらいの狼達や途中から現れた金髪で長いボサボサ髪な外国人みたいな方がこちらの高校の制服を着たまま現れません。

そして、半額神が弁当にシールを貼り終える瞬間まで特にアイコンタクトまでしてないお二人がこの時、予想外な行動を取るとは私で

すら想像が出来ませんでした。

第3話（前書き）

もう少しで今年も終わりますが、来年もよろしくお願いします

第3話

S i d e 鏡

まさか、一人でここまで語る事になるなんてこの作品の主人公が誰なのか正直、疑いたくなる方もいるかもしれませんが

とりあえずそれはさておき私の目の前では、半額弁当争奪戦が始まっております

4人がかりの狼達を湖の麗人が抑えて弁当を奪おうとした瞬間に片手でチョップして彼女の手首を標的から離す泰綱とその間にお弁当を手に入れる姉さんが去っていき

悔しそうに睨みつける湖の麗人を相手に泰綱は何も気にしないまま目の前にお弁当へと手を伸ばそうとしましたが

彼女も同じ手を使って彼の手首蹴り落とそうとした瞬間に彼女の蹴りを肘関節を大体90度くらい曲げたまま肘で抑え込む為に間合いを詰めながらも空いてた片腕でお弁当を手にいれてしまう流れまであっという間に終えてしまい

彼もお弁当を手に入れるもただその場から戦場を去り湖の麗人が負けたところを私は見届けてましたが

正直、言いますと泰綱は私が思っていたよりこの闘いに慣れていた様でもあり

湖の麗人とぶつかる前なんて、姉さんが眼で指示を出して向かってくる男達の背後をとっては背骨に肘を思いつきりぶつけて相手を怯ませたりして倒したり

相手の太股の裏側に買い物かごを思いつきりぶつける姉さんとぶつけられた買い物かごの威力で前側によるめきながらもバランスをとろうとした相手の腹部へと割り箸を小太刀で突き刺すように深く差し込むよう一撃をいれたりとしていた姿もありましたけど

闘い終えた後に何か足りないような表情でこちらを見つめていたお二人の眼を逸らしながらも昨晩、泰綱が余分に冷やしていたサラップに包んだご飯を冷凍庫に閉まっていたのを思い出しながらもおかずになりそうなお惣菜を適当買い終えてお店から出ると泰綱が自分より背丈が高くて眼の細い男性と睨み合ってる姿が映っており

その空気にどうしようか少々困りきった姉さんのところへ近寄ると泰綱が彼に向けてより睨みを効かせます。

「……………加次郎。まさかお前さんが帝王^{モナーク}の方へ裏切るなんて思いもよらなかつたぜ」

「……………所詮は、弱肉強食つす。俺は、あんたと手を組み続けるよりもあの御方にお仕えする事を選んだまですよ。どうつすか？一匹狼になるより閣下にお仕えしてみては……………」

「……………なるほどな。だが、俺はどつちにも着かねえし着く気なんざ更々ねえんでね。んじゃ、ここは帰らせてもらっぜ」

「ヒヒツ……………何だかんだで裏で生き抜いたのも義姉達を貶めた男を倒す為でやしたからな。全く、3年も前に彼女達を貶めた男と挑んで派手にボコられたのを機に”仕置き人”みたいな事して群がつて襲う犬達や大猪を黙らせた方が言う台詞ですかい？貴方が”仕置き人”として3年間も動いてたのは”仕事”だからとかじゃない。でなきゃ、湖の麗人だつて黙らせたところか二度と狼としても生き残れないように出来たでしょう。なので、あんたがそこにいらつしゃる双子の姉達を貶めた男を復讐する為に働いてたに過ぎないなんてわかってやしたよ。だから、特に自分の名も売れやしやせんし、大した事もないせいか無性にバカバカしくて手を切らせて貰つたんですよ。まあ、貴方が西区の猟犬達を黙らせたお陰で帝王^{モナーク}閣下のご機嫌は宜しいようですしこちらもいい立場を頂きやした。ヒヒツ、次機会うときが楽しみですね」

加次郎とかいう人が何か怪しげに笑うのに無言でブルブルと拳を震わせていた泰綱の姿に、流石の姉さんも何か我慢のしどころが無いような雰囲気を出していきなり彼の頬を思いつきり殴り付けたのは流石に驚かされましたが

何故でしょう。

昨夜の彼の行動が何となく分かった気がします。

多分、彼は今まで名を挙げてあの男とスーパーという戦場を舞台にもう一度闘うつもりだったのででしょう。

まあ、ホームページまで開いてたくらいですから100kmも離れた町まで届かない訳でも無いかもしれませんが

私達の為に今まで御自分を傷付けながら3年の月日を過ごしていた彼が何だかかんだで見られてられませんので私達は勝手に逃げた加次郎とかいう人を無視しながらもまた何処かへ消えそうな彼の手を姉さんと共に強く握ります。

「……………全く。貴方一人でモナークを相手にするなんて無策無謀な行為です事よ。それに、貴方が傷付いてもわたくし達は嬉しくも何も御座いませんの。ここはわたくし達と組むのがお利口だと思われ
ますわ」

「はあ……………解っちゃいませんな。貴女が目立ち過ぎればまたあの野郎に狙われるんですぜ。なら、俺が黙って相手をした方が効率良いじゃないですか？」

「……………泰綱。もう私と姉さんは”あの男”から逃げません。だから、今度は私達と手を組みませんか？今夜の闘いを見てあんなに楽しそうな泰綱の顔を見たのは初めてでしたし、私としては組んでも構いません。多分、その方が良いかもしれませんが、私達があの闘いを繰り広げたのもただ単純に楽しかったからでしたし……………」

「……………そういう事ですの。全く、朝から鏡の話聞いておかしいとは思ってましたけどやはり、貴方なりに私達の身を守りたかったのでしょうか。本当、貴方のそういうところは相変わらず不器用ですね」

姉さんが泰綱の事を語るとまるで何もかもがお見通しだったように聞こえるから不思議ですね。

何時もなら私が姉さんの面倒を見てるような気がしますけど今の姉さんは、まるで出来の悪い弟を可愛がるような優しい姉という雰囲気
気が漂っています。

まあ、泰綱もそれを解っていないながら何か顔を赤くした様子ですけど

多分、内心では何処か嬉しいんでしょうね。

「昔から桔梗姉にだけはこういう嘘がつけませんでしたからな。つたく、俺もどうなっても知りませんぜ」

「あら、わたくし達を侮らない方が宜しい事ですわよ？それに、貴方だって鏡と三人で組んでみたいってあの闘いで感じてたんじゃなくって？」

「……………まあ、俺と桔梗姉だけだと完全に暴走しがちですからね。誰かサポート的な人がいれば、ちよつくら楽にはなるとは考えてはいましたが……………」

「大丈夫でしょう。泰綱の闘い方はわたくしと合わせるのですらたつた一度でどうにかなったのですからそこに鏡が加われれば”鬼の穴に挿入”と言ったところですわよ！」

「……………最後だけ嫌な言葉ですな。相変わらずこういう場面で変な下ネタを無意識によく使えますね」

そこで、啞然となる泰綱のお気持ちが分からないでもないですが

たまに、慣れてしまつ自分が最近では若干怖い気がします。

多分、泰綱みたいに引こうとしてるのが本来相手が抱く気持ちなの
でしょうけど

今回だけは逃がすわけにもいきませんので、私は逃げ去ろうとする
泰綱の腕を掴んだまま何で逃げるのか分からない姉さんの対応とし
て本来ならつつこみたいとこですがここは別の手でいきましょう。

「……………全く、姉さんの言葉で恥ずかしがるなんて変わってますね。
ここは素直に甘えるべきとこですよ」

「い、いや……………そこは、かがみ姉がつつこむところじゃ……………」

「あら？何かおかしな事でも言いましたか？ほら、家に帰ったら今
夜は思いっきり激しく抱いてもあげても構いませんことよ」

「あ、ちよつと！…ここにとんでもない発言してる義姉がいますよ
！かがみ姉、なんで俺を盾にしてつつこまないんすか！？つて、他
人のフリしないで下さい！いや、マジで恥ずかしいですから！？」

「……………はあ。ここは、姉さんの御厚意に甘えるのが筋かと思わ
れますよ。全く、素直じゃありませんね」

因みに、本当に私が他人のフリをしながら二人を見届けながらも距離を置くといくら身長がそこらにいる男子より若干低いからと真つ赤な顔をしてる義弟を強く抱きつく姉さんの姿に周囲から妙に暖かい雰囲気で見られたせいもあり

泰綱の顔が真つ赤になってるのがよく解ります。

まあ、その後に家まで帰った後もベッドの上で彼を抱いたまま寝てしまった暴走状態の姉さんを放っておいたのには、些かやり過ぎた気もしますが

こうして見る姉さんも意外と可愛いかもしれませぬね。

第4話（前書き）

更新させて頂きます

第4話

S i d e 梗

朝の眩しい日差しに浴びて起きたところわたくしのベッドの上には見覚えある男物のパジャマが散らばっており

何が起きたのか考えながら昨夜の事を思い出してみれば義弟とはいえ血が繋がっておられない泰綱を強く抱いていたとこまでしか覚えておらず

どうもその後が思い出せないまま頭の中が勝手にフリーズ致しますと思わず部屋から着崩れしている制服姿でドアを思いっきり叩くよう開けて朝食準備をしている鏡に何があったか改めて聞いてみる事に致します。

「ねえ！？何故、わたくしのベッドの上に昨年のクリスマスの際、鏡が泰綱に差し上げて以来、何気にあの義弟がお気に召してるパジャマが御座いますの！？というより、何故私だけ泰綱と身体を合わせて繋がった記憶が無いのですか！？」

「…………… ああ、毎回着てたのは気を使ってくれたんじゃなくて気に入ってたんですか。後、大声でそんな恥ずかしい会話を朝からしないで下さい。それに、私達は別に彼とその様な事はしていませんし、泰綱も帰ってから寝る際も気を使ってご自身の部屋で寝てましたよ」

「で、では何故、わ、わたくしと泰綱が抱き合ってる記憶が御座いますの!?! こうしてはいられませんわ!! 起こしにいつてまいります! 昨夜の事を詳しく聞かせて頂きますわ!!--」

何故か、めんどくさそうな顔をした妹が珍しくわたくしの肩を掴んで止めておりますけどお二人がかりで何を隠してるのかかなり気になります。

そして、すっかりケジメでもつけさせなければどうも癩に触るのであの義弟の部屋へ行くとしわくちなな制服姿なまま起きて寝惚けたような雰囲気で挨拶なさる泰綱がスルーしたまま御自身が昨夜買った半額お弁当を冷蔵庫からお取りになってレンジで暖めておられる間にコーヒ―を淹れる為にお湯を沸かしながらのんびりと昨夜コンビニにでも売れ残ってたのを購入なさったであろう少年週刊ジヤプを眺めております。

「全く朝から呑気なもので御座いますこと!! 泰綱、貴方…………… 昨夜はわたくしを攻めましたの? それともわたくしの攻めを貴方が受けましたの? どちらなのですか!?!」

「かがみ姉。朝っぱらからとんでもない誤解してる姉が朝一番にいきなりとんでもない事聞いてますが、どうしたんですか？俺はこのジャプを読まないとしても今週のワピースやぬ孫が気になつて学校でも呑気に休んでられないんですけど……」

「確かに、あの様な質問を答えても正直、引きますけど暢気にジャプを読んで寛ぐならもう少し姉さんに付き合ってください。貴方が急に悪戯しなければこの様な事も起きなかつたかと思われませんが……」

「いや、桔梗姉の寝癖が悪くなければこんな事しなかつたんですけどね……いや、ようやく家に着いていきなり抱き締められたままくんかくんか臭いを嗅がれ……」

「あら？そんな事してたのですか……」

「という事は勿論、その先まで進んだ可能性だつてあつてもおかしくありませんよね。」

「むしろ、わたくしの予想が当たれば泰綱は如何わしい本やDVDを購入してまでは行ってなくても異性を好む方だと思われますし」

となれば、絶対にわたくしが襲つても全て受け入れてくれたんでし

よう。

何か、惨めに感じます。

「……………泰綱、もう白状なさい。本当はわたくしが貴方を襲って騎士位になって貴方の上に跨がっては、腰まで激しく振って凄まじい一夜でも御過ごしになったのでしょ！？お願いだから全てお話しなさい……！」

「いや、本当にそんな夜過ごしてませんから！？というか、話を聞く気ありませんよね！？そんなに心配だったら来月に月経が来るかどうか確認しておけばいいじゃないですか……！」

「……………あ、貴方。御自身が何を言ってるかお分かりですか……………
ってそうすわ！そうすればよろしいですものね……！」

それにしても、何故でしょうね。

隣にいる鏡がわたくし達から引いていますの。

全く、どんなところで引いたんでしょうね。

「まあ、生理の話を出した泰綱にも引きますが……」

なるほど、確かにそんな話を異性が話したらドン引きなさいますわね。

本当、我が義弟ながら情けないですわ。

「その泰綱の話に乗る姉さんにも引いてたりします。というより、姉さんと泰綱の場合、下ネタになると盛り上がりますよね」

「いや、そんな事も無いと思いますよ……というより、今まで姉さん達が百合に見えたせいとかそっち方面に興味津津なんだとは思ってはいましたが……」

「あら？そう見えたのですか……わたくし達を百合の花に見立てるなんてなかなか面白いところもありますのね」

「……いえ、この時の泰綱は姉さんと同じように色々と手遅れな場合があるのだと最近、つくづく感じてましたけど多分……その百合は花の方ではなく一部の方々がレズという女性同士の同性愛者だと思ひ込んでんだと思われます。でなくては、私が掃除次いでに見つけたこの出納帳に記されている闇夜の狼として稼いでいた”仕事の報酬”とは別に”売り上げ金額”なんていう欄にある収入金額についてご説明出来る機材が泰綱の部屋から幾つか見当たりま

した」

鏡から証拠の物をお渡ししましたのでビデオやデジカメのデータを覗かせて頂きましたけど中身は完全に消え去っておりますわね。

まあ、目の前にいる方は色々と神経質な方でしょうからこういう物も鍵を挟じ開けないとなかなか開かないでしょう。

鏡がその物が何処にあったか教えて下さったところを見れば、見事に赤外線センサーなど無駄についてたのには、流石に驚かされましたけど

似たような物を扱う部もありわたくし達がこのような物を解除するくらい朝飯前なんです

どうも、予想外だと感じて苦笑する泰綱の雰囲気を見るとそれ以外にも何かお隠ししておられるんだと考えながらもわたくしは、彼が閉まっていそうな引き出しを取り出し中身に入っていた貯蓄されておられた通帳金額の方へと目を向けさせて頂きます。

「……………なるほど。十万近くも貯蓄なさっておりますわね。この出納帳に記されておられる金額とお比べになって貰えないかしら？」

「既に、行わせて頂きましたがこの一年間でここまで儲けていた泰綱のへそくりを如何致しましょうか？」

「ちよ、ちよつと待つて下さい！それを何でお稼ぎになったのか証拠が御座いますか？因みに、そいつはこっちのクラスの奴等でちよつくらバイトして稼いだ額かもしれねえじゃないですか！？」

「……………それも、考えられるかもしれませぬ。良いでしょう。近い内に御証拠が見つかり次第、こちらへお呼び致しますので覚悟は出来てますよね？」

「……………そんなもんがあるとは思いませんがね」

因みに、この時ばかりから烏田高校への調査を始めようと致しましたけどモナークとの一戦とある少年の証言によってこの捜査が一気に進んだという事があつたなんてこの時ばかりは、予想もなさってはいませんでしたわ。

因みに、彼はこの時冷や汗を出しておられましたけど特に証拠も無かったので

あまり、追い詰めて彼の通帳を手に入れる事が出来なかったのが些か、残念では御座いましたね。

第5話（前書き）

今日は、2話連続更新させていただきます

第5話

S i d e 鏡

何時ものように生徒会の仕事を済ませながらも一休みしていた時でした。

ちよつとばかり仕事をこなしている時に泰綱から魔女の縄張りらしき西区のスーパーに”氷結の魔女”・”湖の麗人”の二人が動いているという情報に

姉さんが飛び込んだのには溜め息を漏らしましたが一体、どの様な形で情報活動なんて行っているのか些か気になるので聞いてみれば、モナークの追跡をしようと動きだそうとしたところこちらにいる筈の”湖の麗人”が何故か、そちらの高校の制服まで着て氷結の魔女がいる部室へいるという情報だったらしいですが

この時ばかりは、彼の情報が意外と役立ちます。

『まあ、あんな金髪が通って目立たない訳でもないですから俺以外にも気付いてた奴はいたでしょう。そういや、俺もそろそろ向かわ

せて頂きますけど、かがみ姉も見に行きませんか？どうせ、桔梗姉は既に向かつてるでしょう』

「……………その通りですが、相変わらずお互いに理解してますね。因みに、今回は闘うのですか？」

『さて、単独で動いてた頃ならばここは引き際なんでしょうが、桔梗姉が出たのなら迂闊に一人で待たせる訳にもいかないでしょう。かがみ姉も今日は参戦しませんか？多分ですが、あの人の狙いは今の状況だと思いますし……………』

「……………そうですね。丁度、向こうの戦力を見定める機会にもなりそうですから間違いなく乗り出すでしょう」

『では、場所はメールで指定しておきますのでよろしく頼みますよ』

電話を切ってから直ぐに指定のスーパーをメールで知らせてくれたお陰か私もどうにか魔女がいるとされているスーパーへと着けましたが

まさか、あの義弟がこの時ばかり普段ではあり得ない程、目立つとは流石の姉さんでも予測していませんでした。

『……おいおい、あんな山伏みたいな下駄で歩いてまた身長を伸ばそうとしているんだろっな』

『まあ、そりゃ遠くから見りゃ幾らか見えなくもねえがあいつもたまに見栄っ張りだからな』

「……おい。そういう事は本人に聞こえるよう言っんじやねええええー！」

「ああ……それ気にしてたんですね。まあ、良いんじゃないですか？それより、下駄なんか持ってた事なんて知らなかったんですが……」

「まあ、鞆の中とかに隠したりしてましたからな。それに、この下駄を身長を高くするだけの道具だと思っただけまだ甘いですね」

「……大方、それで靴を踏まれればさぞかし痛いでしょうね。あら？ここで、オチを言われるのは不味かったかしら？」

ああ、そういう意味だったんですか。とは言ってもそんなベタな方法なんて見抜けるんじゃないでしょうか

ただ、それも使い方次第によればかなり嫌な技でしょうけど

ハズレたら逆に踏まれちゃいますが当たればかなり効率が良いですよ。

というより、ここまで嫌な技もなかなか無いですが逆に意識すればかわしやすい技でもあるんですがね。

「普通に足を踏もうとすればかわせますけど相手が別に意識を向けていれば如何かしら？」

「いきなり踏まれればなり痛いでしょうね。まさか、彼の狙いがそこだとも言うんですか？そこを狙うにしても流石に、相手の行動範囲を想定しないと難しいと思われませんが……」

「流石に、何回も使うような技でも御座いませんし狙うにしてもそこそこ相手にならない狼にしか行いませんわ。それに、革靴と違って下駄でしたら基本的に速度なども落ちますが、彼の戦闘スタイルは言葉で語るよりもその場で感じた方が早いでしょう。それより、ここまで目立てば今の二つ名は無くなるでしょうね。全く変なギヤラリーを増やした加次郎という彼が裏で飼っていた犬の仕業でしょうけど、基本的に東も西も狼には関係無いのが泰綱の概念です。なので、私達もあの子の動きから目を離せば面倒ですわ」

姉さんがいつも以上に、泰綱がいるところへと警戒しているのが何故か珍しいようにも感じますけど

多分、姉さんよりも暴れるんでしょうね。

ただ、いつの間にか彼が姿を消したのを考えれば

こちらの負担もそれなりに面倒かもしれないんですが

今はそれよりも半値印証時刻が始まりますのでそちらに目を向けると

こちらに目を向けながらも半額シールに目を向けておられますけどシールが貼り終えてジジ様と呼ばれている半額神が去っていくと同時に、私達の背後を取ろうとした顎髭が特徴的な方がこちらに攻撃なさろうとした瞬間

背後から姿を消していた泰綱が彼の脇腹に平手の状態で何か斬り込むように一撃を込めますと脇腹をおさえて睨み込むのすら気にせず泰綱が標的へと私達を誘導なさるよう先頭に出ますが

そこには、魔女が率いていた青年とピアスをなさった方が標的の前で争っておられますけど

そこに目をつけたのでしょうか

いきなり、ピアスを付けてる方の足首を踏むかと思えばその方と争っておられる青年の靴を強く踏み泰綱に目を向けておられましたけど

あの子は、ただ後ろへ体重をかけながらも標的を掴もうとする方に肘うちを強くきめたせいでしょうか

お二人に強いダメージを食らわした間に姉さんの合図で向かってくる魔女が率いてたもう一人の女性がお弁当に手を伸ばそうとした瞬間に姉さんがそのお弁当を手に入れ私も泰綱より先にお弁当を手に入れましたが

泰綱はというと残った一つに目をつけ魔女と麗人が狙っているお弁当へと目を向けますが

麗人が魔女にやられたのが彼から見たら思ったよりタイミングが早かったのか彼が弁当を取ろうとした瞬間

泰綱はというと後方から魔女の蹴りを食らったままそのお弁当を取

れないままこの闘いはあの子だけがカップ麺という形で終わりました。

「……………貴様が”闇夜の狼”か。思ったより油断ならない奴だな。多分だが、先にあの双子に取らせなければ余裕で取れただろう?」

「……………どうだろうな。ただこれでその二つ名や仕置き人なんて物が消え去った気分で意外と気軽だから今は、これで良かったかもしれんが、今回はこっちの負け……………どんな経緯であれこうやって闘える方が気持ちいいものだ」

「……………そうか。まあ、私としても仕置き人やら闇夜の狼なんていうただ襲う事しかないお前より今のお前の方が良いと思うぞ。それに、常に色々と補習みたいなものでも残る時に見かけたあるのは気のせいかな?」

「いや……………奇遇だ。というより俺は未だにテストの総合点数で100位内になつた事が無いからだろう」

「……………そうか、ここに似た者がいたとはな。お前とはあの先生の補習になれば絶対に会える気がする」

それにしても、あの”氷結の魔女”がそこまで成績が宜しくないとは思っていませんでしたが

その魔女と似たり寄ったりな成績でもある我が義弟には、些か不安を覚えます。

これはこれで姉さんと一緒になるべくやらせておかないといけな
いと思われず。

なので、この晩は二人でお弁当を召し上がりながらも一人黙々とど
ん兵衛の蕎麦を味わっていた泰綱には、食事後には無理矢理にでも
毎晩30分ケースで勉強をさせる事としましたが

どれもこれも壊滅的な今の彼の頭には、流石の姉さんですら溜め息
を漏らしながらも泰綱を翌日から放課後には私達が通う学校へと来
てもらいつつしっかり勉強を教える事を提案する代わりにスーパー
への出入りは、半値印証時刻30前まで立ち入り禁止及び学校が終
わればここに至急来ることを彼の私生活へ足す事に決定しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8888z/>

ベン・トー"沢桔姉妹とその義弟"

2011年12月29日14時47分発行